

## 第1回自己組織化プロセスサロンを開催

化学工学会材料界面部会自己組織化プロセス分科会では、今年から表記サロンを不定期に開催することとし、その第1回目を、2010年8月26日(木)~27日(金)に関西大学飛鳥文化研究所(奈良県高市郡明日香村)で行いました。自己組織化を扱う研究は裾野が広く、今、まさに、物理、化学、生物学といった理学分野の研究者による基礎研究と化学工学などの工学系研究者との間で、動機、興味、アプローチなどについてディープなディスカッションが必要とされています。遠慮のないディスカッションを行うためには、その前提として相互の信頼に基づいた人間関係が必要です。そのため、本会では、サロンと称して毎回多彩な分野から少人数の講師をお招きし、20人程度までの参加者で宿泊形式の討論会を行うことを意図しております。

本サロンで扱う対象は、両親媒性分子系、粒子系、流体系、高分子系、など、多様な物質を対象としていく予定ですが、根底にあるのは自己組織化という現象に含まれる普遍的な要素への関心であり、それらについて語り合い、参加者が、出身分野特有のバックグラウンドを活かした新しい研究の着想を得ることにあります。また、化学工学を学ぶ若手研究者が、今後一層この分野を勉強せねばならない、と感じるような学問的なものが萌芽するのかどうか、についても考えることができればと思っています。

今回は、講師として3人の方をお迎えしました。まず、京都大学の渡邊哲氏(化学工学)に「パターン状粒子膜の自己組織化構造制御」について、つぎに理化学研究所の武仲能子氏(物理学)に、「構造転移する界面活性剤集合体内部でのナノ粒子生成」について、最後に、名古屋工業大学の長津雄一郎氏(機械・流体工学)に、「Viscous fingering流体力学的パターン形成に及ぼす化学反応の影響」について、講演していただきました。それぞれ、90分の時間の中で、分野の相違による述語の違いなどの基本的なところから、現象そのものについての本質的なところまで、根掘り葉掘りという感じで、これほど講師の話を中心に理解できることはないのではないか、と思えるような時間をもつことができました。1日目の夜には畳の部屋でざっくばらんな懇親会を行いました。年齢層による島状相分離が見られたものの、時間がたつのも忘れて盛り上がりました。この夏は大変な猛暑でしたが、アスファルトやコンクリートの少ない明日香地方は、暑さという点でずいぶん楽でした。

参加者は全部で15名で好意的な感想も多く、今後もいろいろな方をお招きしながら続けていきたいと思っています。部会会員の皆様には案内をさせていただきますので、自己組織化に多少なりとも関心のある方々には遠慮なくお声をかけていただければと思います。最後になりましたが、90分にわたって初歩的な質問にも丁寧に答えてくださった講師の皆様、また、計画の立案からともに考えていただいた関西大学の三宅義和先生、会場の手配やサロンの準備、当日の世話などの全てをしてくださった関西大学の田中俊輔先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(同志社大学 塩井章久)

写真：関西大学飛鳥文化研究所玄関前にて

